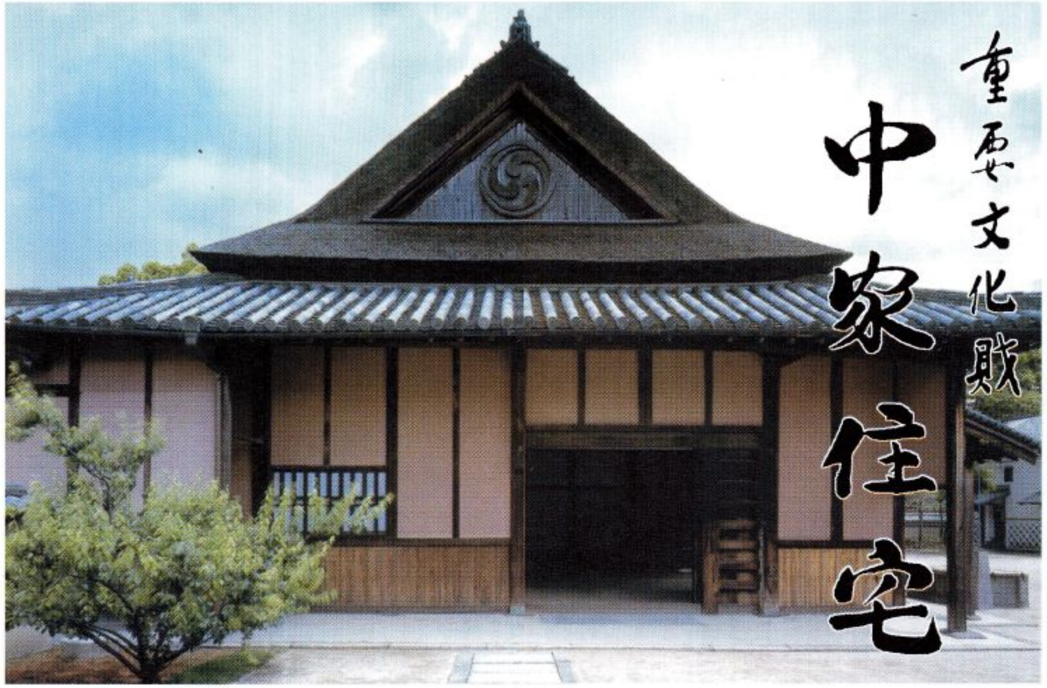


中家の歴史

中家は平安時代、後白河法皇が熊野行幸の時に立ち寄り、行宮（仮設の御所）とした由緒ある泉南地方の旧家です。「中」の家名は、前九年の役（1051～62）に源頼義と共に奥州へ下向した高瀬清原武盛の跡を継いだ嫡男盛晴が、中と改めたことに始まり、盛晴の嫡男盛秀は左近将監に任じられ、中家は代々「左近」を名乗りました。

室町・戦国時代には紀伊国根来寺の氏人となり、根来寺の一子院であった成真院に子弟を送るなど深いつながりをもちました。そして、その勢力を背景に広く和泉国や紀伊国北部に及ぶ田畠を買い集め、また麹販売の権利を持つなど、この地方における政治・経済の担い手として活躍しました。なお、成真院院主であった根来盛重は徳川家直臣として、関ヶ原の合戦や大坂の陣で奮戦し、のち徳川家の旗本になりました。

江戸時代には岸和田藩の郷士代官（松平氏の時代）や七人庄屋（岡部氏の時代）の筆頭を勤めました。谷内には四百石を越える持高を有し、三十軒前後の「家中」と四十軒余りの「内衆」を抱えていました。五門・野田・紺屋・小垣内・宮・久保・下高田の村々の年貢徴収や、年寄・組頭の決定など熊取谷の行政全般を委ねられるとともに元禄５年（1692）には岸和田藩藩札の札元に任じられ、藩経済にも貢献しています。

表　門

唐　門

また中家は江戸時代末期、思想家として活躍した25代当主中瑞雲斎（1807～1871）や、明治時代に衆議院議員を勤めた28代当主中辰之助（1867～1936）などの人物を輩出しています。

なお、中家には室町時代の売券をはじめ明治時代に至る古文書が多数伝えられています。（『熊取町史』史料編ⅠⅡを参照）。

重要文化財・中家住宅（附　表門・唐門　昭和39年5月29日　指定）

中家住宅の南面する大きな表門（三間薬医門）を入ると、正面に豪快な土間を持つ主屋が妻面をみせて建っています。

主屋は入母屋造り・茅葺き・妻入りで、周囲に本瓦葺きの庇をめぐらしています。独立性の強い土間は近畿地方でも最大規模のもので寺院の庫裏や武家の台所を思わせます。また、架構形式を持つ土間と柱の省略の多い居室部は中世の雰囲気があります。その平面の特質はダイドコロが大きく土間に張り出し、踏込みのあるナンドとザシキまわりは喰違三間取りを骨格とし、その形態は古式な様相をとどめています。この形式は泉南地方や和歌山県紀ノ川筋に分布し、喰違三間取りの平面は田の字型の四間取りに発展します。なお、主屋の建立年代は江戸時代初期と考えられています。

中家住宅は、現在でも広い敷地を占めますが、江戸時代後期の古図によると、敷地構えは今よりもはるかに大きく、主屋の東側には別棟の式台玄関のつく客殿（書院）がある他、表門の位置も主屋よりずっと手前にありました。また、西面し組物をもつ向唐門（重文）は客殿にいたる賓客用の門として利用されました。他にも長屋門や郷蔵をはじめ付属屋が多く建ち、背後に堀が廻らされるなど、往時の中家の隆盛がしのばれます。

橋本宗吉電気実験の地
（町指定文化財　史跡　平成8年3月13日　指定）

中家住宅主屋西側に周囲５m、樹齢600年といわれる松がありました。江戸時代中頃、大坂の蘭学の開祖、橋本宗吉（号を曇斉という。1763～1836）はフランクリンが凧を使って空中電気の正体を確かめた実験（1752年）を中家の協力のもと、この松を使って電気実験を行いました。この様子は、宗吉の著書『阿蘭陀始制エレキテル究理原』に挿し絵入りで「泉州熊取谷にて天の火を取りたる図説」として紹介されています。台に立っている人は、高さ19間（約34.5m）の松の枝に取り付けられた桶のようなものから伸びた針金を持っています。雷雲がやってきたとき、空中の電気をうまく捕まえることができた様子は、もう一人の人の指に火花が散っていることでわかります。また、この挿し絵は望遠鏡製作で有名な貝塚の岩橋善兵衛が描いたものです。

宗吉は蘭書からの翻訳が中心であった江戸時代において、避雷針の発明につながったフランクリンの実験を紹介するだけでなく、自らも実際に試み、その事実を確かめていった態度は、わが国の電気学のパイオニアと呼ぶにふさわしいものがあります。

休 館 日　水曜日（祝日の場合は翌日）、年末年始（12/29～翌年1/3）
※１・２・８月は土・日曜日・祝日のみ開館

開館時間　午前10時～午後４時30分（入館は４時まで）

入 場 料　無　料

使 用 料

使用区分 ＼ 使用時間		3時間未満	3時間以上
主屋	2分の1未満	500円	1,000円
主屋	2分の1以上	1,000円	2,000円
庭　園		1,000円	2,000円

問合せ及び使用申込み
熊取交流センター（煉瓦館）内
熊取町教育委員会　生涯学習推進課
〒590-0415
大阪府泉南郡熊取町五門西1-10-1
TEL　072-453-0391

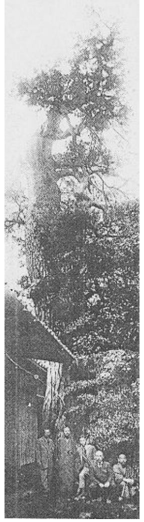
中家住宅の詳細

藩札

中家は岸和田藩の藩札の札元となり、藩の財政を支えました。

元禄５年(１６９２)に発行を開始しました。

巨松



天の火を取りたる巨松。

これは、橋本宗吉が電気(ｴﾚｷﾃﾙ)実験を行った松の写真（昭和初期頃の撮影）です。
現在は、中家住宅の庭に、その切株が残っています。

中家住宅には、中世以降の古文書が数千点残されています。その多くは田地売券等ですが、そのなかに交じって貴重な文書も多数あります。
これは熊取のだんじりの歴史を知るうえで貴重な古文書です。
天保１２年(１８４１年)には、だんじり祭りが、行われており、その中で最も古い大久保のだんじりは文化2年(１８０５年)につくられ、和田・朝代は担ぎだんじりだったと記されています。

熊取谷檀尻書上げ（くまとりだにだんじりかきあ）

天保１２年(1841年)１０月　中家文書（なかけもんじょ）

乍恐奉申上候

一 檀尻　文化九申年初而出来候　五門村
一 同　文政七申年右同断　小垣内村
一 同　文化十酉年右同断　宮　村
一 同　文化二丑年右同断　大久保村
一 同　文化五辰年右同断　小谷村
一 同　天保十亥年右同断　七山村
一 荷檀尻　天保四巳年右同断　和田村
一 荷檀尻　朝代村

但し、是ハ往古ゟ神躍之列ニ先例出し来り候ニ付、年号相分り不申候

右書上之通相違無御座候、以上

天保十二丑年十月（一八四一）

熊取谷　役　人

御代官中様

ゟ:「よ」と「り」を組み合わせた合字ひらがな。「より」と発音する。